巻　頭　言

ひとは子どもというものを知らない、とルソーは『エミール』の序文のなかで語った。児童中心主義や学習論への転換をもたらしたこの著作は、現代日本の学校教育にも多大な影響を及ぼし続けているが、その最も深い影響は、先の一言への反省にあるのかもしれない。つまり私達大人が、子どもというものを知らないという自覚のもとで、子どもがいかなる存在であるかに迫り続けねばならないとするような、学習支援者としての義務感と弛まぬ努力を生み出したということである。

その努力は、とくに最近では学習者の多様なニーズに応える特別支援教育として結実するなど、学校をはじめとする教育の改善に多大な貢献を果たしてきている。また、戦後の我が国の教育学が、国家の教育政策や経済社会の要請に対抗するとき、子どもという自由な学習主体を拠り所として人間的教育の理念を保持しようとしてきたことも、すでに指摘されているところである。子どもというものを知らない、と自覚することは、教育対象の理解を深めるための動機というだけでなく、教育者の側の反省的思考と自己批判の契機をつねに確保するためにも不可欠な基盤である。

しかし、近代教育学が経験したように、子どもを知ろうとする努力は、子どもの隠された内奥を明るみにし、子どもを操作するための手段を拡張させもする。効率的な学習支援とは、それが教育者側の無自覚な目的に適うものであるかぎり、子ども自身のために子どもを操作する技術としての一面を持ってしまう。それゆえに私達は、自らが依拠する教育目的やその基礎にある人間観を絶えず検証しなければならない。しかしまた、私達は、現実とある程度の距離を置きながらその検証を推し進めながらも、現実の個々の子どもが直面する喫緊の課題にともに向き合い、その解決に向けて行動していかねばならない。教育における理論と実践の往還は、両者の緊張ある関係のなかでいわば踏みとどまりながら進むという難しい営為でもある。

この困難な課題に研究・実践の両面にわたって取り組んでこられた岡直樹教授が、この 3 月にご退職の日を迎えられることとなった。岡教授は、平成 18 年度より教育実践総合センターにご着任後、翌 19 年度よりセンター内に開設された心理教育支援室「にこにこルーム」において、学習に課題のある地域の小中学生をサポートし、またこれに学生を参画させることで彼らの実践的指導力を育成し、研究・教育実践両面の能力に優れた多数の人材を社会に輩出してこられた。この取り組みは平成 19 年に広島大学 GP「子どもの心と学び支援プログラムの展開」として採択され、大学と地域に多大な貢献を果たされてきている。学習開発学講座の一員として、岡教授のこれまでのご功績にあらためて深甚の感謝と敬意の念を抱くとともに、理論と実践を行き来しながら子どもというものをたえず探究し、またそのことを通じて一人ひとりの子どもに寄り添おうとする岡教授の姿勢を範とさせていただき、いっそう努力を重ねていきたい所存である。

今回第 11 号を迎える『学習開発学研究』も、もちろんこの課題に取り組まれている多くの研究者・教育者の方々の成果を交流するまたとない場である。本研究紀要ならびに編集主体の学習開発学講座の発展のため、皆様からのご指導を賜れば幸いである。

平成 30 年 3 月

広島大学大学院教育学研究科
学習開発学講座主任
編集委員長　山内　規嗣